

春
夏
秋
冬

5

四季のコンサートだより

1989年9月1日発行

浜松音楽友の会

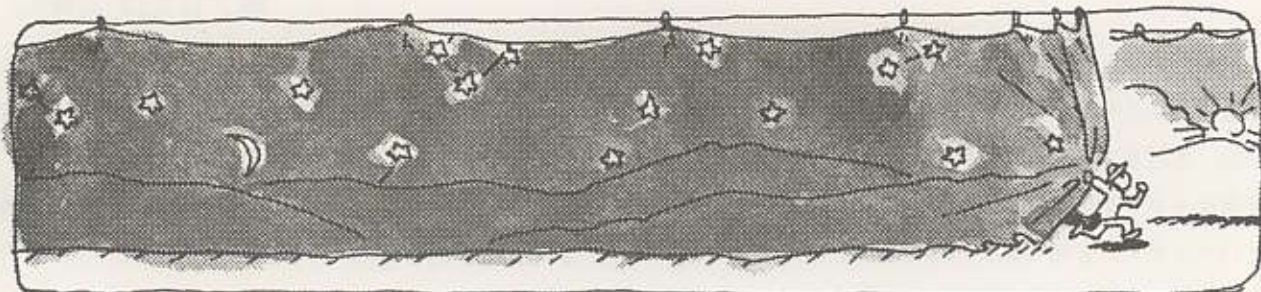
事務局 浜松市東伊島1-10-507

電話連絡 54-1746 (高田)

ふれあいおんがくかいによせて

岩崎育子

四季のコンサート「浜松音楽友の会」が発足してから早5年もの年月が過ぎようとしています。その間、数多くの又、広いジャンルの素晴らしい音楽会を催していただきましたこと大変感謝しております。今こうして振り返ってみますといろいろな事が思い出されるのですが、中でも一番に浮かぶのは、第一回目の市民会館のあの満員の客席です。「本当に良かった。」と何故かとても嬉しくほっとしたあの時の気持を今でもよく憶えています。それよりしばらく前のある日、スタッフの方からお電話をいただき「浜松音楽友の会」発足についての熱意溢れるお話を聞かせていただきその素敵な企画にびっくりしながらあまりにもよく考えられたご計画に何だか夢のようだとも思いましたが、これが実現できるのなら、微力ながら、陰ながら応援させていただきたいと思いました。中でも特に喜ばれましたのが、保育室を設けて下さるという事でした。育児の間は音楽会はとても無理とあきらめていた友人・知人が会員になり親子で楽しみにしていました。又、生の素晴らしい音楽を聴くという事は、過去の浜松ではあまり望めませんでした。良い音楽会は少ないし、これほど出して客席の騒がしさに途中で帰って来てしまったり等々、こんな思いをひとつひとつ解消する、良い音楽をマナーよく聴きましようというこのコンサートの企ては、本当に素敵です。最初は夢のようだったこの会が五年間、着実にその夢を実現し、大きな成果をあげられて、多くの音楽愛好家を育て喜ばせて下さいました、スタッフの皆様のご苦勞は想像に余りあるものと思ひ心よりお礼申し上げ、この会が益々発展し末長く続けていただけることを願っています。



1990年 コンサート予定

春	弦楽アンサンブル「ナーダ」と野島稔(ピアノ)演奏会	4月16日(月)	市民会館ホール
夏	東京トロンボーン四重奏団 演奏会	6月15日(金)	〃
秋	リュージュ・チモフェーエワ ピアノリサイタル	9月20日(木)	〃
冬	堀米ゆず子ヴァイオリンリサイタル	11月29日(木)	〃

「友の会」と私

渡 辺 昭



私が「友の会」のコンサートを知るようになったのは、高校在学当時のクラスメートであった「友の会」のスタッフから、発足当時お誘いを受けたことがきっかけでした。しかし、当初は仕事の都合上夕方の時間が確保しにくいということもあって、申し訳ないことに会員とは名ばかりの状態で推移していました。もっとも、実際には、それまでが、ずっとクラシックからは縁遠いところで過ごしてきたという生活スタイルからくる、一種の敬遠意識の要素の方が大きかったように思われます。

それでも、その後、別のルートから妻が会員になったこともあって、子供達を含め家族揃ってコンサート会場に顔を出すようになりました。実際に出かけてみると、当初のなんとなく懸念していた肩苦しさ等はなく、会場全体にどことなくアットホーム的な雰囲気漂うなか、やはり生で聴くクラシックには、知らず知らずのうちに魅了されてしまいました。演奏の合間に行われる、出演者とのインタビュー形式による対話も、その人となりや人生観の一端が垣間見られて、大変有意義な企画と思います。

また、会場に必ず保育室が併設されることも、幼児を抱える世代にとっては大変有難いことです。

そして何よりも驚くべきことは、こうした有数の一級品の音楽を、このような低廉な負担で楽しめるということでしょう。それは言うまでもなく、全てを「友の会」のスタッフがボランティアで行っているからに他ならず、その御努力には本当に頭が下がる思いです。

この浜松の町が、本当の音楽の町、真の意味での文化都市と呼ばれるためには、音楽やその他の芸術を楽しみたいと思う人が、誰でも気軽にそれを鑑賞しうるシステムが整備されていることが、最低限必要と思います。その意味で「友の会」の活動は、高く評価されて然るべきでしょう。私も「友の会」によって、クラシックの楽しみ的一端を教えられ、これからもさらに、教えられて行くと思いますが、同時に同会の発展にもこれからささやかながら助力していきたいと思っています。

木村俊光バリトンリサイタルを聴いて

池ノ谷光洋(高校生)

今回の四季のコンサートは、昨年に引き続き声楽のリサイタルが行われました。昨年はソプラノの佐藤しのぶさんでしたが、私は都合によりおしくも聴く事が出来ませんでした。とても素晴らしい演奏会だったと聞き、非常に残念だったのですが、今回、木村さんのリサイタルが行われるという事でとてもうれしく、今年こそはと楽しみにしておりました。

演奏会はイタリア古典歌曲に始まり、モーツァルトのアリア、ブラームス、ラヴェル、シューマンの歌曲、そして日本の歌曲とバラエティにとんでおり、私達を楽しませて下さいました。普段声楽のリサイタルというと、有名なオペラのアリアというのが多いのですが、木村さんは歌曲を、しかも皆さんが良く御存じの曲を歌われたのでした。

ラルゴやカロ・ミオ・ベンに見られるゆったりとした響き、ブラームスやシューマンの重厚さ、ラヴェルの神秘的な感じなど、それぞれ巧みに表現され、あるいはモーツァルト特有のはぎれの良い言葉や日本歌曲の豊かさといったものが、歌の中からあふれ出す程でした。

一曲ごとに軽快で楽しいおしゃべりがあり、その歌の意味や言葉、背景にある街の話や歌にまつわるエピソードなど、滅多に聞く事の出来ない話を沢山して下さいました。その上あのバリトン独特の甘い歌声が、会場内に響き渡ると、まるで自分が当時のヨーロッパにでもいる様な、不思議な感じさえ覚えてしまうのでした。

音楽の中で、歌は人間の体だけで表現される唯一のもので、そこには人間の心、生命があります。この演奏会で、またひとつ、歌の心にふれ合うことが出来たことをうれしく思います。

ふれあいコンサートに行つて

鳥居美香・美保（小学生）

わたしは、ふれあいのコンサートには、母と妹、友達といっしょに行きます。入つたのは、昨年の秋ごろでした。音楽のコンサートなんて、それまであまり行つたことがなく、初めての時は、とてもドキドキしました。

この音楽会を通してわたしが学んだことや感じたことは、まず、すばらしい生の音楽を聞いてよかったということです。レコードで聞いたり、ラジオや、テレビで聞いたりするよりも、やっぱり、わたしたちの目の前で、生で演奏されている、という感動も加わるので、聞いていてもよけいに感げきます。また、インタビューや、曲のあいまのおしゃべりも楽しくて、思わず笑ってしまつたりもします。七月の、木村俊光さんのバリトンのリサイタルの時には、曲の説明の他に、失敗談なども話してくれたので、わたしは、ほとんど笑っていました。わたしは、合唱部に入っています。だから、このふれあいコンサートで、おしゃべりまじりの歌のコンサートは、熱心に聞いて、とても良い勉強になりました。声の出し方がとても上手でした。ほかのときの、バイオリンのコンサートや、ピアノのコンサートも、わたしにとって、とても勉強になりました。やっぱり、生の演奏というのはいいものだ。とつくづく思います。

このふれあいコンサートに入つてよかった、とわたしは思います。ほかのコンサートだと、おわりの方は、ねむくなってしまふのに、ふれあいコンサートは、ユーモアがあつてとても楽しいし、とても自分のためになるからです。これからも、このように、コンサートを続けてほしいと思います。わたしも、このふれあいコンサートを通して、多くのことを学んでいきたいと思っています。

スタッフだより

「浜松音楽友の会」のスタッフを勤めてきて

振り返ってみますと、この会のスタッフとして、もう6年の月日がたちました。その間、私のできたことは、他の方々の後ろについて行くばかりで、小さな力でしかなかったような気がして、本当に申し訳ない気持です。

でも、設立当時を思い出してみますと、集まつたスタッフの熱気、良い音楽を身近で聴きたいという強い気持、そして、その素晴らしいさを、沢山の方々と共に体験したいという純粋な気持が集まつたメンバーの体中から、あふれていて、本当に素晴らしいと思ひました。でもそれがこうして6年間も続いているということは考えてみると、大変な事だと思ひます。その間には、スタッフのそれぞれにも生活の変化がありましたし、友の会自体にも、山あり谷あり、色々な事にぶつかつて思考錯誤が続きました。でも、1回ごとの会が終るごとに、聴き終つた音楽の感動と、それぞれに素晴らしい個性の持主である演奏家に会えた喜びや、聴いてくださった方々の「よかったよ」という言葉に励まされたことや、やはりこの広い世の中で音楽を通じて、人間と人間がふれあえる喜びがあつたことが、こんなに長く続いた源だつたのじゃないかと思ひます。

私もボランティアとしてスタッフを勤めさせていただきましたが、本当は、こちらが、何に向つてかはわかりませんが、お礼を言わなくてはいいのじゃないかと思ひほど沢山の経験をさせていただきました。ありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願ひします。



お知らせとお願い

会員だより 皆様のご寄稿をお待ちします。400字詰原稿用紙2枚以内でお願いいたします。

会員登録 は年度が変わってもそのまま継続されます。

退会希望の方は住所 氏名 電話 会員番号を御記入の上前年度の10月末日迄に事務局宛退会の旨御連絡下さい。

名義変更の方も葉書に旧会員と新会員の住所 氏名 電話 会員番号(旧会員の)をお書きの上事務局宛お送り下さい。

1989年 秋のコンサート 10月16日(月) 6:30PM～



小林道夫指揮

チェンバーオーケストラ・TOKIO リサイタル

〈チェンバーオーケストラ・TOKIO プロフィール〉

桐朋学園で育った若い世代による弦楽アンサンブル団体として、1987年に発足。

〈弦の桐朋〉と言われて久しいが、現在、最も意欲的に弦楽合奏の分野に取り組んでいる合奏団である。小林道夫、小沢征爾、ロストロポーヴィッチ、カール・ライスター等、内外のアーティストとの共演も多い。既存の室内合奏団がバロックの演奏に重点を置いているのに対し、この合奏団はそればかりでなく、近・現代作品をもレパートリーとしている。

〈プログラム〉

バッハヘルベル：カノン

ヘンデル：ヴァイオリンソナタ第6番

V.1. 青木高志

アダージョ

アレグロ

ラルゴ

アレグロ

ジョルダニー：チェンバロ協奏曲

アレグロ

ラルゲット

アレグロスピリトーズ

三善 晃：弦楽の為の組曲

プレリュード〈バッハ風〉

ガヴオット〈ラヴェル風〉

アルマンド〈シューマン風〉

フィナーレ〈ハイドン風〉

ショスタコーヴィッチ：二台のヴァイオリンの為の小品

チャイコフスキー：アンダンテ・カンタービレ

弦楽の為のセレナーデよりワルツ

モーツァルト：ディヴェルティメント 第1番 K. 136

アレグロ

アンダンテ

プレスト

1989年 冬のコンサート 12月13日(休) 6:30PM

仲道都代ピアノリサイタル

モーツァルト／ピアノ・ソナタ イ短調 K310

シューマン／さすらい人幻想曲 ほか

第51回音楽コンクール第1位。1986年ジュネーブ国際コンクール入賞。
翌年メンデルスゾーン・コンクール第1位。エリザベト王妃国際コン
クール入賞。以後ヨーロッパを中心に演奏活動を開始。二十一世紀を担
う若手ピアニストのホープ。西独在住。



1990年 春「シリーズ ナーダV」が浜松で楽しめます!!

「ナーダ」は、元東京クワルテットの第1ヴァイオリニストとして世界を股に活躍、室内楽に精通している名手原田幸一郎と、ソリストとして忙しく活動するかたわら、室内楽にも力を注いでいる数住岸子が企画した、室内楽のシリーズです。

「ナーダ」はサンスクリット語で“宇宙にある全ての音”の意。原田幸一郎と数住岸子の二人が、数ある室内楽の名曲の中から選曲し、一線級のゲストを迎え、作品の豊かな世界に聴衆の皆様をご案内します。

〈予定メンバー〉 原田幸一郎、数住岸子（ヴァイオリン・ヴィオラ）、小栗まち絵（ヴァイオリン）

安田謙一郎（チェロ）、野島 稔（ピアノ）